

# ダルクにおける「回復」の社会的検討Ⅱ（２）

——手に入れる／手放される「回復」観——

○四天王寺大学 平井 秀幸  
東京大学 伊藤 秀樹

## 1. 目的

近年、ダルク（DARC）における「回復」のあり方が注目を浴びつつある。ダルクにおける薬物依存からの「回復」とはなにか、という問いは、これまでも精神医学、刑事政策学、社会福祉学といったさまざまな領域で論じられてきたが、実際にダルクに入寮・通所するダルクメンバーが抱く「回復」イメージが問われることは少なかった。ダルクメンバーは、いかなる事柄を「回復」と関連づけて理解している／していないのだろうか。また、メンバーの社会的背景によって「回復」イメージは異なるのだろうか。本報告では、ダルクメンバーの抱く「回復」観とその他の諸変数との関連について、計量分析をもとに検証する。

## 2. 方法

本報告では、第1報告と同様、2008年1～3月に全国のダルク関連施設（運営団体44か所、施設66か所）の利用者に対して実施した質問紙調査（郵送自記式）の分析を行う。有効回答者数は445名（男性397名、女性44名）であり、かれらの「回復」観について尋ねた質問項目を分析対象とした。とりあげた「回復」観の項目は、薬物依存からの「回復」を、それぞれ①「ありのままの自分の受容」②「仲間の中で生きていくことの大切さの理解」③「経済的な自立」④「薬物への欲求の消失」と回答した者の割合である。上記「回復」観と、性別、年齢、学歴、ダルク歴、主な依存薬物、経済基盤（生活保護の受給）、矯正施設の入所経験、幼少期の経験、精神症状などとの関連性について検証した。

## 3. 結果

ダルクメンバーのうち、①、②が「回復」であると理解する者は80%を超えており、また、ダルク歴が長い人ほど「回復」であると理解する傾向にあった。一方で、③、④が「回復」であると理解する者の割合は①、②より低く、また、ダルク歴が長くなるほど減少する傾向にあり、両者は質的に異なる群であることが示唆された。そこで、③、④を合成した「回復」観変数を従属変数とした重回帰分析を行ったところ、性別、学歴、主な依存薬物、刑務所・少年院への入所経験、入寮／通所の別、15歳時の階層、不安感・不眠などの精神症状、などの諸変数との関連は有意ではなく、ダルクに在籍した期間、生活保護受給の有無、の2つの変数とのあいだにのみ、有意な負の関連がみられた。

## 4. 結論

①や②といった「回復」観は、ダルク歴の長いメンバーにとっては極めて一般的なものであるといえる。それに対して、③、④のような「回復」観は必ずしもそうとはいえない。メンバーの属性やこれまでの経歴、経験にかかわらず、少なくないダルクメンバーは“ダルクに在籍する中”で、経済的に自立することや薬物への欲求が消失すること自体を「回復」とみなすような考えを徐々に手放していくのである。「ダルクで暮らすこと——ダルクの日々——」それ自体が、なんらかのかたちでメンバーの「回復」観の醸成過程（「回復」に対する考え方の変容）に影響を与えている可能性が示唆される。